

世界の中心は近江八幡にあり

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

職

場の近くで開催されたヴォーリズの特別展を見ているうちに、近江八幡へ行きたくなくなった。著名な建築家のヴォーリズが、「神の国」を創ろうとした拠点であり、さらには名物の鮒ずしにも挑戦したかったし、近江牛はもつと食べてみたかった。

旅の初日は安土城を見物してから、歩いて近江八幡へと向かった。夕飯は念願の近江牛を食べたが、すきっ腹へ目一杯押し込んだので大散財となった。

翌朝は近江の古い街並みと、そこに点在するヴォーリズの建築を見に行った。近江八幡は商業都市として発展した水郷で、近世の風情が豊かに残る。

明治三十八年二月二日、この町にアメリカ人ウィリアム・メレル・ヴォーリズは降りた。敬虔なクリスチャンの彼は、建築家を志しながらも、明治三十五年にとロントで開催された「海外伝道学生奉仕団」の世界大会において、義和団による中国人信徒および白人宣教師虐殺事件の講話を聞くうちに、海外伝道の徒となる決意をした。まだ二四歳の彼は、近江八幡の第一夜を次のように記している。「ホームシック。寒い。頭痛がする。寂しい。しかし、もう来てしまったのだ。」

彼の伝道は、宣教師のそれではなく、様々な職業を通じてキリストの教えを実践するYMCAの教

義に基づいていた。来てしまったからには、やらねばならない。滋賀県立商業高校の英語教師として教鞭をふるいながら、バイブルクラスを開講し、わずかな期間で多くの生徒の信仰を勝ち得ている。しかし、彼を快く思わない仏教徒によって教職を追われ、

明治四十三年に建築設計監理会社「ヴォーリズ合名会社」を設立する。その後も布教活動の経済基盤として数々の事業を展開した。メンタームの「近江兄弟社」もその一つであり、彼は近江八幡を世界の中心と唱え、ついには帰化して一柳米来留（いちやなぎ めいりゅう）となった。

ところで、有名な建築作品は、良くも悪くも周囲から浮き出るような、訳のわからないオーラを放っているが、この地に残るヴォーリズの作品は普通の建物にしか見えなかった。

彼は『失敗者の自叙伝』で、次のように述べている。「たとい建築家の評判を高めるような、壮大な建物を作ることができても、かんじんの中に住む人は、建築家の幻想の所産にすぎない芸術作品のおかげで、自分らの生活や職業を、その建築物に合わせて調節せねばならないという不便な結果になってしまう。」なるほど、著名な建築家の作品は住みづらいたか、維持管理に余計な費用がかかるなどの話を、しばしば耳にすることがある。ヴォーリズの設計思想は、

私が最も好むものだ。

ぶらぶら町を歩いていると、ヴォーリズの銅像があった。拳を突き出し威嚇する女の子を教化している姿かと思ったが、「これは女の子が花を贈っているところだよ」と同行者が論してくれた。言われてみれば、女の子の像は花受けを持っており、二つの像の間に花束が落ちていた。風で落ちたのか、それともいたずらか。花を活けなおす同行者を写真に収めながら、どの店の鮒ずしが美味いだろうかと、ぼんやり考えていた。



ヴォーリズの銅像

【交通】JR近江八幡駅より徒歩30分

※碑文の全文は日建連HPIに掲載しています。